

雑誌研究の現状 二〇二二

経緯と現状

小宮と日本現代史研究会が取り組んできた雑誌研究、及び、プロジェクトに関して、二〇二二年二月時点の現状をまとめたい。

そもそのきっかけは、二〇二〇年三月刊行の『史友』52号に「特集雑誌研究」を企画したことにはじまる。冒頭の「本特集について」から引用したい。

企画を立てた小宮は、青山学院大学文学部史学科で日本現代史を担当している。(中略) 現代史研究者には常識ながら、時代が下れば下るほど、一次史料にアクセスすることが難しいという状況に直面する。学生たちも、必修である卒業論文を執筆する際に史料の限界にぶつかることが多い。同時に、卒論の題目を見るだけでも(『史友』毎号に掲載)、学生たちが文化史に関心を持っていることも明らかである。こうした状況下で、二、三年ほど前から、国会図書館や大宅文庫に近い地の利を活かし、雑誌を用いた研究を行うこ

とを推奨している⁽¹⁾。

小 宮 京

この企画を進めるに際して、二〇一九年度に、青山学院大学文学部附置人文科学研究所の研究プロジェクトとして「雑誌を用いた日本現代史研究」が採択された。代表は小宮、共同研究者は佐藤信(東京大学大学院先端科学技術研究センター・助教(当時))である。

また、二〇一九年当時からの変化として、新型コロナウイルスの感染状況に伴い、国会図書館等の利用に大きな制限がかかった。そうした状況下でも、遅々たる歩みではあるが、雑誌研究を進めているのが現状である。

『史友』52号には、論文として、小宮京「『nicola』小史 チャイドルからニコ⑥へ」、佐藤信「世紀末の結婚雑誌…『結婚潮流』から『ゼクシイ』まで」、インタビュートとして、松田健「『大航海』の終焉」、奥山晶二郎「with news 五周年を振り返って」、書評として、森岡恭子「書評 長谷川晶一『ギャルと『僕ら』の二〇年史 女子高校生雑誌Cawaii!の誕生と終焉』」を掲載した。

それに続いて、二〇二一年三月刊行の『史友』53号には「特集 雑誌『Olive』研究」を掲載した。複数の学生が『Olive』に強い関心を持ったこともあり、同誌を集中的に取り上げた。同号には、論文として、脇川茉也「一九八〇年代の読者モデルの定着…『Olive』と『nonno』を中心に」、研究動向論文として、藤根秀佳「『Olive』をめぐる研究動向」、インタビューとして、花田（栗尾）美恵子述、聞き手・小宮京・藤根秀佳「花田（栗尾）美恵子『Olive』の頃を語る」、書評として、上村七海・音成すみれ・万波アイシャ「書評 酒井順子『オリーブの罌』（講談社、二〇一四年）」を掲載した。企画には、学部生にも積極的に参加してもらった。

こうして、前述した研究プロジェクト「雑誌を用いた日本現代史研究」の成果として、『史友』52号掲載の、小宮、佐藤の論文、及び、『史友』53号掲載の花田インタビューが刊行された。なお、小宮京「雑誌を用いた日本現代史研究」について「文学部附属人文科学研究報告」第2号（青山学院大学文学部附属人文科学研究、二〇二一年三月）所収、一〇九—一一八頁では、小宮論文「『nicola』小史」（『史友』52号）で扱ったニコラの欠号を取り上げ、さらなる考察を加えた。

このように、研究プロジェクトを推進しつつ、『史友』や『文学部附属人文科学研究報告』で、雑誌研究やその成果を継続的に発表してきた。

本特集について

今回は『青山史学』の誌面を借りて、論文とインタビューを掲載する。

第一に、小島彩香「『ゼクシィ』の出発」である。本学史学科を二〇二〇年度に卒業した小島は、卒業論文で最優秀賞を得た。その卒論を改定したのが本稿である。「ゼクシィ」という雑誌は、結婚を控えた人たちのみならず、多くの人々に認知されている。しかしながら、その創刊の経緯や誌面の変遷など、基本的な事実ですらこれまで明らかにされていなかった。小島論文は『ゼクシィ』本誌を一次史料として活用すると同時に、関係者へのインタビューを用いることで、そうした状況を打破する試みである。雑誌の創刊、そこからの変化は非常に興味深いテーマであり、幅広く読まれることを期待する。

第二に、雑誌研究の原点に立ち返り、編集者にインタビューした。今回は、『外交』の中村起一郎編集長にお願いした。

周知の通り、『外交』は日本で唯一の外交専門誌である。こうした特定の分野に特化した雑誌について、例えば、防衛省が刊行する『MAMOR』は、お見合い企画が話題となり、編集長が様々な媒体で取り上げられた。これは例外であろう。通常は、編集長がインタビューに答える機会はそう多くはない。とりわけ『外交』に関しては、企画の立て方を含め、どのような形で雑誌を編集しているのか、外部からは全くうかがい知れなかった。不躰ながら中村編集長にお願いしたところ、お話頂くことをご快諾頂いた。学部生にとっても、貴重な機会となったであろう。

ことは間違いない。記して感謝する。

コロナ禍という状況下で、様々な雑誌の休刊が報じられている。もと
もと雑誌の売れ行きがあまり良くないところに、止めを刺された感があ
る。後世から見ても、こうした当期の状況を証言として残すことの重要
性は高まっている。今後も、雑誌編集者の証言を積極的に取り上げたい。

註

- (1) 小宮京「本特集について」『史友』52号(二〇二〇年) 一一五―一二六頁。
- (2) <https://www.aguhinaoyama.ac.jp/repo/repository/1000/21771/>

〔謝辞〕

本特集、およびこれまでの特集は、日本現代史研究会の協力を得ている。本特集
については、市川周佑氏(博士後期課程一年)と、寄稿してくれた小島彩香氏(博
士前期課程一年)に感謝したい。

インタビューにご協力頂いた、中村起一郎氏(都市出版)、インタビューの整理
を手伝ってくれた小島氏に、感謝したい。